酒人を飲む

「酒は百薬の長」というが、同時に「酒は百毒の長」なることわざもある。「一杯は人酒を飲む、二杯は酒酒を飲む、三杯は酒人を飲む」とも言われてきた。凡人には、酒の飲み方は難しい。

首都圏の大学で数日前、男子の新入生（２０）が急死した。居酒屋で開かれたオリエンテーリング部のコンパに参加し、２次会の会場で昏睡状態で横になっているのに周囲が気づいた。救急車で病院に運ばれ、死亡が確認された。一気飲みまではしなかったようだが、コンパでは泥酔者が何人も出たらしい。大学当局は各サークルの責任者らを集め、「コミュニケーションの手段を酒の力に頼りすぎるな」と注意したという。

アルコールは脳の働きを麻痺させる。呼吸をつかさどる部分まで麻痺すると、死に至ることがある。ゆっくり飲んだ場合は、量を過ごすと気持ちが悪くなって、それ以上は飲めない。ところが急激に過度に飲むと、自己防衛の機能が作動する前に一気に危険な状態に陥る。昨年は全国で少なくとも５人の新入生、新入社員が、急性アルコール中毒で命を落とした。

歓迎といっては酒、歓送でも酒、めでたければ酒、「残念」ならなおさら酒。何かというと酒、が日本の組織の風習だ。

「俺の杯が受けられないのか」と目の据わった輩が酒を強要する。酒の上での乱行、失敗を反省するときも、酒に頼る。つまり、コミュニケーションの手段はもっぱら酒。若者は、学生時代にすでに、その風習に染め上げられる。

といいながら、実は私も、酒の誘惑にはからきし弱い。自戒を込めて以上の文を書き、自戒を込めて「酒に酔って公衆に迷惑をかける行為の防止等に関する法律」（１９６１年公布）の第二条を読み返す。

「すべての国民は、飲酒を強要する等の悪習を排除し、飲酒についての節度を保つように努めなければならない」。